

Nara Women's University

奈良市付近の巨樹と名木

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2015-04-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小清水, 卓二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/3951

奈良市附近の巨樹と名木

小清水卓二

凡そ巨樹と名木とは學術上貴重な參考資料であるのみならず、一面由緒ある郷土の歴史を語り、延いては愛郷心愛國心の源泉となる絶好の記念物である。假令名木と稱せられるものでも、若しその樹が一定の樹齡を重ねてゐないと、眞のよさや、神秘さが現はれないのが常である。平凡な雑木でも多年風雨に曝されて、而も平然たる巨樹であると、吾々は此の樹に近づくだけでも、何となくその樹に神や、吾々の祖先の靈魂が宿つてゐるかの感が起り、自ら敬虔な氣持が湧き、崇敬の念に打たれる。實に巨樹は如何に科學の力を以てしても一朝一夕に形成されるものでなく、平凡な毎日々々が積り、時には非常の危機に際會して而も屈せず、盤根錯節に邁つてこそ始めて出來上つたものである事を考へても、如何に他に掛け替への出來ぬ貴重な存在であるかゞ領かれる。

皇紀二千六百年の佳き年に當り、肇國大和に於ける巨樹と名木とを記録する事は、此の佳き年に際會した吾々が、次の時代の子孫に残すべき一つの責務と考へる。幸ひ奈良縣社寺課、公園課を始め、岸田技師、川島技手其他各地各方面の多數の篤志家の援助を得て、奈良縣下全般に渡つて此の方面の調査を行ひ、今やその記録が大體完成した。縣下全般に渡る報告は他の機會に譲り、茲には仲川、森川兩氏の希望により範圍を奈良に限定して、

奈良市附近の巨樹と名木につき紙面の許す範囲で、その主なるものゝ一部を紹介致したいと思ふ。

▲ 巨 樹

春日若宮前のクスノキ（樟・豫章・樟樹）



春日若宮前の大樟

我が國現存の巨樹中最大の樹種は樟に見られる。彼の鹿児島縣始良郡蒲生村の八幡神社境内にあるものが日本一の巨樹である。地上一米半の幹圍が實に二十二米七十糎もあり、樹齡八百年以上と推算せられてゐる。此の日本一の巨樹に比すれば、奈良春日若宮前の樟は地上一米半の幹圍十米で、前者の半分にも足らぬが、然し此の飛び離れて巨大な鹿児島島の樟は別格として、他の地方で樟の巨樹として天然記念物に指定されてゐる二十三件の樹に比すると、大して遜色がない。今から二十五六年前、本多靜六博士が此の樟を測定された時、目通八米八十糎と換算されてゐる。測定の場合や方法による多少の差はあるとしても、二十五六年間に幹圍が一米も増大した事は興味ある事實である。元來樟は生長が迅速で、樹齡の割合に巨大になるものである。彼の淺茅ヶ原の明治四十一年十一月十四日特別

陸軍大演習御饗宴場たる明治天皇玉座趾に記念植樹された三本の樟の如きは、植樹當時の大きさは不明であるが、僅々三十三四年後の今日、最大木は實に幹圍三米二十糎にも及んでゐるのを見て驚嘆せざるを得ない。

ナ　ギ（竹柏・山杉・染杉・烏心石）

春日神苑の竹柏の純林が果してその昔、献木から始まつたか、それとも自然分布から始まつたかは、今なほ再検討の必要がないでもないが、然し今最も有力とせられてゐる献木説から始まつたものとする、此の神苑の竹柏林中、最大老樹は如何なる處にあるか、又それに次ぐ大樹が何れの位置から何れの方向に分布してゐるかが興味ある問題となるのである。先年來、竹柏の密林を



竹柏の巨樹

隅なく歩き廻つた結果、春日神社南參道の若宮西南三百米ばかりの位置の密林中に、從來記録されてゐた最大竹柏樹よりも優に一米近くも太い樹が見當つた。地上一米半の幹圍四米八十糎で、古色蒼然たるものである。十數年前、小倉博士は當時春日山に於ける竹柏の最古樹とせられてゐた幹圍三米九十糎の樹齡を年輪測定の結果一千年と推算されたが、これを基準として今度の最大木を推定すると、優に千數

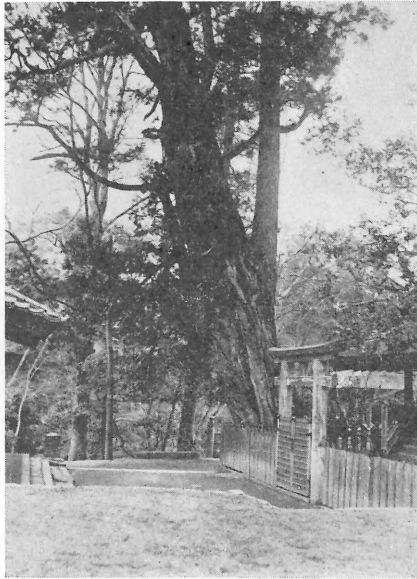
百年を下らぬものとなる。

水谷神社のイブキ（ビヤクシン）（柏槿・栢心・白身・白心・檜・檜栢・側栢・圓栢・刺栢・刺松・崖栢樹・栢・栢）

水谷神社の左側に栢槿と杉との寄生木がある。巨大な栢槿が主體となり、杉がその樹の中に取り込められた形

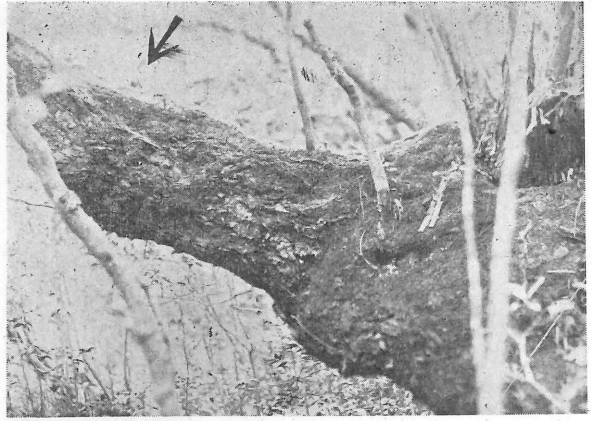
になつてゐる。栢槿の幹圍は地上二米半の處で六米五十五糎に及び、栢槿としては貴珍な存在である。

從來天然記念物として指定されてゐる栢槿の巨樹には、香川縣小豆郡淵崎村寶生院のもの（地上一米の幹圍七米半）、愛媛縣宇摩郡松柏村のもの（地上九米十糎の幹圍八米）、山口市のもの、靜岡縣四方郡西浦村大瀬崎神社のもの（地上二米半の幹圍六米三十糎）の四樹があるが、水谷神社の栢槿は正に靜岡縣大瀬崎神社のもの以上で、貴重な存在と云はねばならぬ。



水谷神社の栢槿の巨樹

アセビ（榎木・米仔茶）



樹 巨 の 木 桜

奈良の標徴として有名な榎木は、灌木ではあるが奈良に相應しい古木が多い。特に春日神苑の西南部に此の種の純林が美事に分布してゐる。最大木も此の方面に見當つた。地上一米半の幹圍實に二米三十糎にも及んでゐる。奈良には何故榎木が多いかと云ふ事はよく問題となるが、結局、有毒植物なので鹿の害から免がれる事が主なる原因の一つと考へられる。

ウハミズザクラ（波々迦）

古來から太占の神事の卜庭に使用される波々迦が如何なる植物であるかに就ては、種々の考證があり、異論もある。然し昔から、由緒ある大和の天香山神社や、宇陀の水分神社の波々迦なるものを見ると、日本特産で本州中部地方に廣く分布するウハミズザク

ラである。處が同じく大和の笛吹神社の、これも昔から由緒ある波々迦と稱せられてゐるものを見ると、支那原産のニハザクラである。又和名抄には波々迦の漢名を朱櫻・櫻桃、即ち支那原産のユズラウメに當ててゐる。皇紀二千六百年の橿原神宮祭器天香山埴採に當り、昭和十四年五月十三日天香山神社の御廣前に、いと嚴そかに施行された太占の神事には、天香山神社のウハミズザクラが使用された。又昭和元年御即位御大典に當り、悠紀主



國的にも珍らしい存在で正に日本一である。

イチヒガシ（石櫛・赤柯・赤皮）

三笠山の西部山麓、春日神社の東方竹柏の密林中に巨大なイチヒガシがある。地上一米半の幹圍九米三十糎に及んでゐる。從來天然記念物として指定されてゐる此の種の巨樹は、熊本縣玉名郡南關町大字

樹巨の迦々波

基の齋田御卜定には、對島の龜卜家の手を経たウハミズザクラが使用され、又大正天皇御大典の際には、日光のウハミズザクラが使用されたと傳へられてゐる。

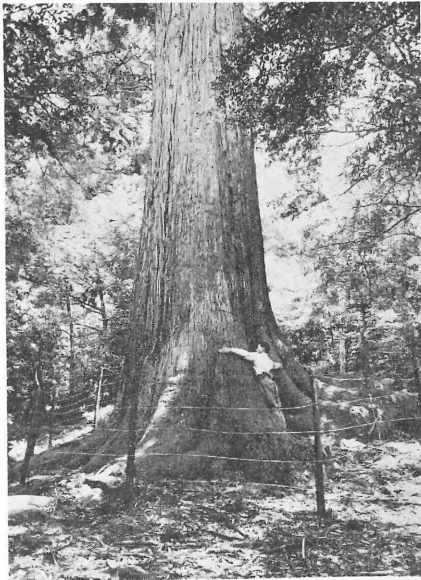
此の由緒あるウハミズザクラの巨木が、春日神社の東方三笠山の西部中腹部にある事は興味ある事で、地上一米半の幹圍實に五米三十糎にも及び、全



樹巨の櫛石

關東のもの（地上一米半の幹圍九米三十糎）と、山口縣美禰郡共和村大字青影のもの（幹根境界部の太さ七米六十糎）との二樹であるが、この二樹に優らばとも劣らぬ美事な巨樹で、樹勢も極めて旺盛で、實に三笠山の雄とも稱すべきものである。本來イチヒガンは暖地性の植物で、奈良の地に此の種の巨樹が比較的多いのは興味ある事である。なほ橿原神宮外苑の古代民族住居跡からも、此の種の植物の根株や種子が多數出土した事は、此の植物の古代に於ける分布をも考察せられて一層興味ある事である。

スギ（杉・山杉・孔雀松）



春日山の大杉

奈良の大杉と云ふと、通常奥山南側自動車道路の春日山看守交番所前のもを指してゐるが、これよりも一米以上も大きな大杉のある事を一般には知らぬ人が多い。奈良に於ける最大木たる大杉は、この一般呼稱の大杉（地上一米半の幹圍九米）よりも少し上の道路から稍々隔つた春日山南部十五號區にある。地上一米半の幹圍十米三十糎に及び、全国的に見ても相當な巨木と云ふ事が出来る。杉の巨樹として天然記念物に指定されてゐるものには、高知縣長

岡郡大杉村八阪神社境内のもの（地上一米半の幹圍十五米）、福井縣大野郡石徹白村のもの（十四米）、宮崎縣西臼杵郡椎葉村のもの（十三米三十糎）等を始め、幹圍七米以上のものが實に三十件もある。巨樹として天然記念物に指定されてゐる樹種としては杉が第一で、次が樟である。

奈良春日山附近の老杉は昭和九年の颱風で多數倒れたが、その中最古木とされてゐた目通九米のものであつても、その樹齡は六百年位と推算するに過ぎないから、杉は比較的樹齡の若いものである。なほ奈良の老杉は多くはオホシロサルノコシカケ菌の寄生により、その心材部が侵蝕され、更に落雷其他の關係で頂上が著しく枯損してゐる。

クヌギ（櫟・歷木・椶椀樹・青剛樹・土骨皮・榲桲）

春日神社一ノ鳥居附近に巨大なクヌギがある。地上一米半の幹圍三米五十八糎に及んでゐる。近來サルノコシカケ菌や、蟲害に冒され、今にして保強工作を講ぜねば、數百年の歴史を語る此の巨樹も一朝にして消失するものと思はれる。

クヌギについては奈良には關係がないが、日本書紀景行天皇十八年筑紫巡幸の段に興味ある傳説が記されてゐる。天皇此年秋七月辛卯朔甲子、筑紫後國の御木に到つて、高田行宮に居らせられたのであつた。時に僵れた樹があつて、長さ九百七十丈。百寮其の樹を踏んで往來すると云ふ有様、爰に天皇問ひ給ひて曰く、是は何樹なるかと。一老夫有りて答へ奉るに、是は歷木クヌギ（扶桑木）と申す樹なりと。嘗未だ僵れぬ先には朝日の光に當りては



巨の樺

杵島山を陰し、夕日の光に當りては阿蘇山を覆して
 みたものであると。そこで天皇は是の樹は神木であ
 る、故に是の國を宜しく御木國と號すべしと仰せら
 れたとの事である。今日の三池は、舊御木と稱し、
 此の地方に此の夢の様に巨大な歴木があつた處で、
 今日三池炭坑の石炭は此の木の根が炭化したもの
 であるとか。なほクスギは松の瘤病菌の中間宿主と
 なるものである。奈良公園の松に瘤病菌の比較的少い
 のは、クスギが少い關係と思はれる。

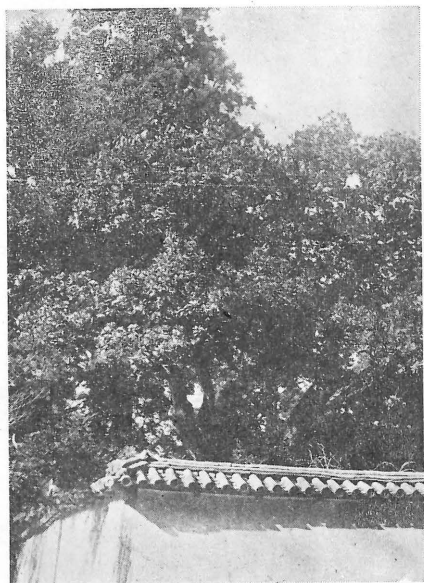
モクコク (厚皮香・水木樺)

モクコクは暖地性の植物であるが、奈良の春日若宮前に、地上一米半の幹圍二米に及ぶものがある。從來此の種の植物で天然記念物として指定されてあるものには、舊松平大學頭の藩邸であつた現東京文理科大学構内のもの(地上一米半の幹圍二米五十五糎)、東京美術學校構内のもの(二米五十七糎)、廣島縣忠海町八幡神社社叢のもの(一米九十糎)の三樹がある。なほ奈良には宇陀郡宇賀志村にも此の種の地方的巨樹がある。

アカシデ (見風乾)

三笠山の西北中腹部に巨大なアカシデがある。地上一米半の幹圍五米八十糎に及んでゐる。此の種の樹は、本來温帯の中北部によく生育する植物で、暖地性の植物が多く存在する三笠山に此の種の巨樹が混在してゐる事は植物分布上から興味ある事である。

此の種の巨樹が滋賀縣犬上郡多賀村にもある(地



樹巨のデシカア

楊梅の巨樹

上一米半の幹圍六米)。土地の人は之を飯盛木と稱してゐる。その謂は、人皇第四十四代の元正天皇の御病氣御快癒祈願の際、此の木を切つて飯匙を作り神符に添へて多賀神社に奉獻して大願成就した事から起り、後世多賀杓子として知らるゝに至つたと傳へられてゐる。

ヤマモモ (楊梅・龍睛・樹梅)

手向山八幡宮前觀音堂境内にヤマモモの巨樹がある。地上一米の幹圍三米半に及び、暖地性植物の巨樹として貴重な存在である。此の種の樹で天然記念物に指定されてゐる巨樹としては、山口縣美禰郡共和村大字青影のもので、地上一米半の幹圍が四米六十糎ある。奈良のヤマモモは此の巨樹に次で珍らしい存在である。

▲名 木

奈良八重櫻

奈良の名木と云へば、何と云つても先づ第一に奈良八重櫻に指を屈すべきであらう。平安朝の才媛、伊勢大輔のいにしへの奈良の都の八重櫻

けふここのへに匂ひぬるかな

此の八重櫻が如何なる種類の櫻であつたかは、嚴格の意味では知る由もないが、然し奈良の都には、古くから著しい重瓣の櫻があつた事は、詞華集、沙石集、徒然草、櫻品、諸國俚人談、榊巷談苑、猿蓑集、袋草紙等の古い文献からも知る事が出来る。

偶々三好博士は、奈良の片隅にある知足院の裏藪に、人知れずして咲いてゐた、いと貴品ある古びた八重櫻を視て、櫻品や古名録等に記載されてゐる「古花」に類する珍奇な八重櫻と同種のものなりと看做され、大正十二年に知足院奈良八重櫻として天然記念物に指定され、史蹟上、文學上、植物學上貴重な存在となるに至つたのである。

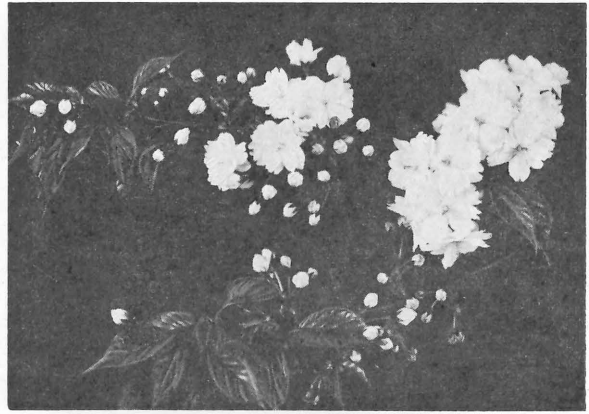
現在の知足院には、初代の奈良八重櫻（指定當時の株は三代目）から引續き自然分蘗による第四代目株（地上

一米半の幹圍四十糎）、及第五代目株（幹圍十五糎）が僅かに餘命を保つて残つてゐるが、此の由緒あるこの場所の八重櫻の保存には特に萬全の策を講じたものである。なほ此の他、東大寺、師範學校、公會堂、春日神社、春日若宮、女高師、公園の一部等にも此の種の櫻があるが、元々樹勢が早く衰へる樹種と見えて、愛護の手が緩むとすぐ枯損して來る。特に他の櫻と異り、挿木は勿論、接木等も頗る困難で、従つてそれだけ又數の少い貴重な存在となる理である。現在奈良に於ける此の種の最大木は公會堂前の地上一米半の幹圍一米十五糎のものと、女高師の一米のものとなる。

奈良の地以外には先づ京都の寶鏡寺（地上一米半の幹圍一米九十糎なるも樹勢とみに衰へてゐる）と桂離宮とにある。此の二樹は天保十年の頃、桂離宮に園林堂を建て給ひし時、此の堂前と、寶鏡寺とに老木の穂を接木したもので、その京の老木も元は奈良の僧都から態々平安京に献じたものであるとせられてゐる。又芭蕉が

一里はみな花もりの子孫かや

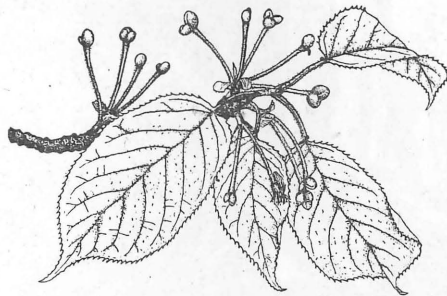
と詠んだ伊賀花垣村にも、奈良八重櫻の古木（地上一米半の幹圍一米半）がある。人によると、此の地が奈良八重櫻の原木の所在であつたとしてゐるが、然し沙石集に記してある様に、「一條天皇の中宮（上東門院）がその別當に仰せて、宮中に八重櫻を運び移し植ゑられんとした時、興福寺僧徒が騒ぎ立てたので、それを中止されたばかりでなく、奈良法師は心なき者とし、此の櫻をわが櫻と名づけん爲め、伊賀國餘野庄を寄進せられ、花垣の庄とせられ、櫻には牆をせさせられて、花の盛七日間宿直して是を守らせらる。」とある事等から考察すると、矢張奈良が此の種の櫻の原産で、花垣の庄の花守が、その一株を花垣の庄に奈良から移植して愛護したものと思はれる。



奈 良 八 重 櫻

なほ此の奈良八重櫻は、植物學的に見ると、赤芽系統のオクヤマザクラが重瓣化したもので、

奈良では毎年五月一日頃が満開である。花瓣の数は平均三十五六枚で、八重にして而もよく結實する珍しい種類である。雌藥の數も多くは二個以上で、多きは五個に及ぶ事がある。發芽力のある種子が一花に數個出来るのも興味ある形態である。



奈 良 八 重 櫻 の 結 實

九重櫻 (奈良八重櫻)

奈良公園グラウンド北東隅に、地上一米半の幹圍二米六厘の、樹勢極めて旺盛な、美しい八重櫻がある。往年ふとした事から九重櫻と稱せられ、それ以來九重櫻として通つてゐるが、古くから存在する天下に名の通つた九重櫻とは異なるものであるから、混同を避ける爲めには寧ろ、奈良九重櫻とか、新九重櫻とか稱すべきものであると

思はれる。此の櫻は赤芽のヤマザクラが重瓣になつたもので、一般に遅咲の他の八重櫻と異り、花に憧がれる四月に、普通の山櫻の開花と同時に開花するのが美點である。

七本杉

三笠山の頂上に七本杉と稱する、七本の大杉が南北に一列に列んで、その根株が互に結合してゐるものがある。此の杉は約三百年内外の以



奈良九重櫻

前に、一本の杉の大木が、恐らく颱風の爲めに倒された處、そのまゝ根が土中に埋もれてゐた爲め活着し、偶々その横枝の七本が生育して夫々主幹状になり、今日に至つたものと確認するに難くない。

七本杉中、南の第一號樹が一番太く、地上一米半の幹圍が三米七

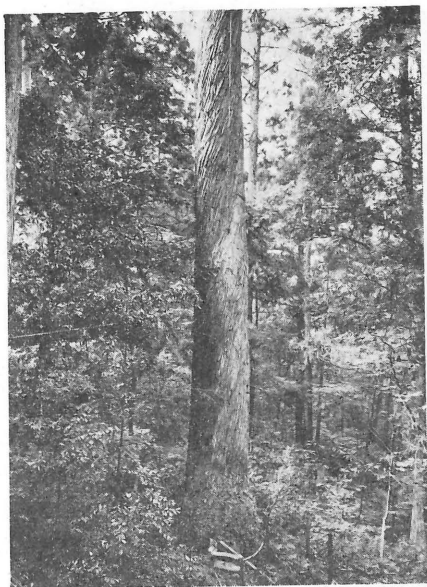


七本木杉

十四種もある。その北の第二號樹は幹圍二米九十七種であるが、最近惜しくも枯損に類してゐる。第三號樹は幹圍二米六十七種、第四號樹は幹圍一米四十種、第五號樹は、往年枯損し、他の杉を補植したもので、幹圍四十種、第六號樹は幹圍三米三十七種、第七號樹は幹圍二米二十七種である。何れにしても植物形態學上興味ある存在である。

振杉

春日山の裏山に當る芳山の自動車道路近くに、振杉と稱して、樹皮が著しく振れた、伸のよい杉の大木がある。



振杉

地上一米半の幹圍四米七十種で、振の度は二十二度内外で、旋回度は僅少であるが、何分大きくて高いので、存外多く振れてゐるかの様に見受けられる。此の振れた理由が遺傳的であるか、それとも後天的機械刺戟によつたのか、或は突然變異に歸因したのか不明であるが、此の樹の種子を蒔いて苗が出来てもその苗の幹が別に振れぬのを見ると遺傳の爲めと思はれぬ。兎に角特殊な形態を示す植物として興味ある存在である。

良辨杉

二月堂の西斜面の芝生の上に一本の杉の大樹がある。良辨杉と稱して有名である。良辨僧正が二歳の時、近江國志賀里（一説に相模の國）で、母親が桑の葉を摘む間、樹陰に置かれた處、大鷲が現はれて、これに攫はれ、

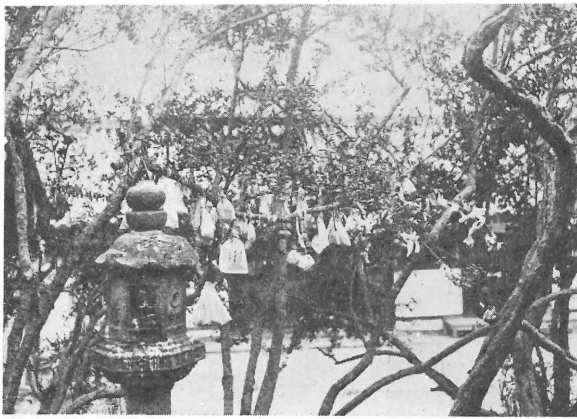
此の杉の樹の頂に置かれたと云ふ傳説の杉で、現代の杉の樹はその後何代目のものかは知らぬが、地上一米半の幹圍が六米四十六厘あり、由緒ある樹とせられてゐる。

二月堂前鬼子母神の石榴

二月堂前の鬼子母神前に十數本の石榴樹が柵狀に密植してある。そしてその樹枝に、三つ成の石榴の果實が、武運長久や、子供の安泰を祈つた紙片と共に堅く結び着けられ、子を思ふ親心が涙ぐましいまでに感ぜられる。

鬼子母神と石榴との因縁は次の様な傳説から起つたものである。

鬼子母神女、好んで人の子をとり啖ふのであつた。釋尊之を憂



鬼子母神前の石榴

ひ給ひ、その一女子をかくされた。神女狂せん計り猛り、連日、連夜を分ちなく叫び覓むるの聲、須彌を振はし人畜を恐しめる程であつた。釋尊神女を説き宣ふやう、「汝は千人の子のうち一人を失ふのみである。憂ふる事はない。」神女怒つて曰く、「佛は慈悲と聞きつるに、などでか、かくも無情の言葉を爲すのであるか、天が下子をかくして心にかゝらぬものがあらうか」と、釋尊説き給ふやう、「汝千子の中一人を失つてさへ、かくの如く狂ふ。汝人の子をとりて啖ふ、其の親の心如何ばかりか」と、神女さめくと泣き悔めるを見、釋尊かくし給ひし一子を出し返し與へ、宣はく、「汝以後人の子を啖ふこと勿れ、若しも人の肉を啖はんと思はば、此の果を味へよ。」

と石榴を與へ給うたと云ふ。

春日神社の七寄生木

春日神社の西裏に有名な七寄生木がある。ヤマザクラ(薔薇科)が最古木として主體となり、フヂ(荳科)、ヤブツバキ(山茶科)、ナンテン(小檗科)、イヌノキ(金縷梅科)、カヘデ(槭樹科)、ニハトコ(忍冬科)の七種の植物で、而も何れも分類學上科の全く異つた、遠縁の植物が一ヶ所に、融和して混植さ



七寄生木

れ、且つ互に繁茂してゐるのを見ると、我が皇國の八紘一字の大精神に對する神の教かの如く思はれて、吾々誠

に崇敬の念にたへぬものである。

春日神社林檎の庭の林檎

春日神社大廣前に林檎の庭があり、一本のリンゴ樹が植ゑてある。林檎の庭は、臨御の庭なりとする説もあるが、それは、その方面の専門家に委ね、茲には林檎なる文字を検討して見ると、林檎の文字は、本来支那原産の梨屬の植物 *Pirus Malus* L. (林檎・平果・櫛果・蘋果・文林郎果)、或は *Pirus baccata* L. (林檎・海棠花・山荆子・疋籮) 乃至は、支那原産で古くから日本に渡來して來てゐるワリンゴ *Malus asiatica* Nakai、或は本州中部地方に分布するズミ一名コリンゴ *Malus Sieboldii* Rehd. に當てべきもので、歐洲原産の、明治四、五年の頃渡來したセイヤウリンゴ *Malus Pumila* var. *domestica* Schneid. には陵果・蘋果或は苹果なる漢字を當てるのが常である。古代から由緒ある神聖な大廣前には、古くから歴史に結びついた東洋の林檎こそ望ましいものである。

花の松

數年前まで、奈良公園五重塔の北隣の東金堂前に有名な「花の松」と稱する奈良公園第一の黒松があつた。(地上一米半の幹圍五米半)。多年風雨、病蟲害に侵害され、種々の復活策を行つたのにも拘らず、遂に空しく枯死し、昭和十二年十月十六日惜しくも姿を消してしまつた。

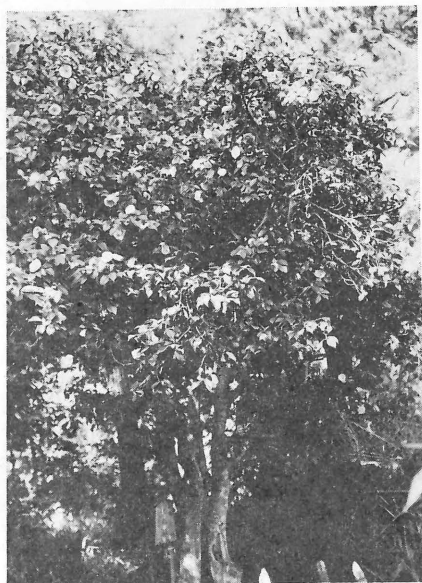
此の名木を切り去るに際し、盛大な追悼會が行はれ、大和毎日新聞が施主となり、

奉誦大乘妙典爲興福寺東金堂花之松從金口直詮頓證菩提

なる、いと懇な、長い塔婆が立てられた。植物愛護心の現れとして誠に床しい感じがした。

此の木の初代は、弘法大師が興福寺に御手向の花として植ゑられたと傳へられ、最近枯れた樹は、今から二百年前、元祿の頃、先代の松の後繼として廣瀬佐次左衛門なる篤志家が献植したものであると云はれてゐる。

その後、二千六百年の佳き年に際し、公園課では、新後繼の黒松（地上一米半の幹圍三十五糎）を植ゑたが、何れ又後世吾々の子孫に、歴史的存在として皇紀二千六百年當時を物語る貴重な巨木となる事と思はれる。



白毫寺の福椿

白毫寺の福椿（五色椿）

白毫寺に、一本の椿樹でありながら、純白・純紅及び紅白種々の程度に斑入になつた、いと美しい椿がある。末梢に至るまで咲き分けになり、色が種々あるので、五色椿とも稱してゐる。此の種の花をつける椿は京都の椿寺の椿を始め、所々に見受られるが、白毫寺のものは比較的古木で、地上一米半の幹圍八十糎に及んでゐる。此の寺に

杖を曳く者が少いので、年々淋しく咲いては淋しく散つて、年を重ねてゐる。

雌 柂

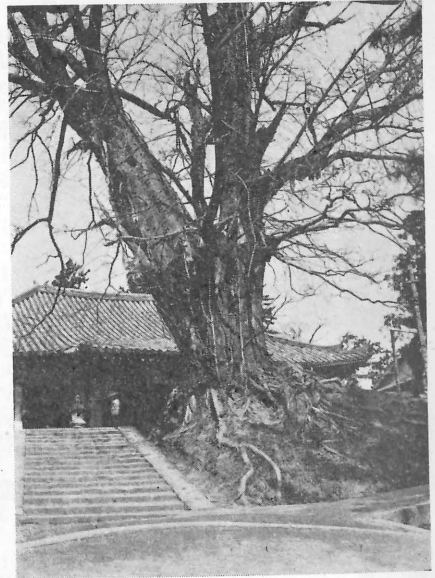
奈良公園飛火野に雌柂メヒトナギと通稱する、葉に刺のない、一見木犀の葉の様な形をした柂がある。地上一米半の幹圍一米半で、葉に刺がないので雌柂と稱んでゐる。然し此の名前は植物學的な名稱ではない。他の地にも此の種のものがあるが、柂の變種として興味がある。

京都の下賀茂神社境内に柂神社があり、如何なる植物を献じても、ここで活着すると刺のある葉、即ち柂となると稱せられてゐる。柂始め種々の有刺葉植物は、幼苗の頃はその葉に刺のない場合が多い。處が之等の苗を植ゑてから、それが一定の大きさに生長すると、本來の刺のある葉が次第に現はれて來る場合が多い。柂神社の柂も此の點で一理がある事が頷かれる。

奈良の雌柂は假令生長して巨木になつても、相變らず葉に刺が全然ないか、或はあつても極めて少いところの變種である。

菩提院大御堂の寄生木

菩提院大御堂前に、公孫樹と、樺と、榎との三種の植物の寄生木がある。公孫樹が主體となり、その幹の空洞部に、巨大な樺の主幹が挿入して生育してゐる。又公孫樹の南面の枝腋には榎が寄生してゐる。公孫樹の大き



木生寄の前堂御大院提菩

は地上一米半の幹圍五米四十糎で、初瀬の素盞雄神社の公孫樹(地上一米半の幹圍六米七十五糎)には及ばないが、奈良市内では先づ此の種の第一の巨木である。

尙ほ天然記念物として指定されてゐる公孫樹の巨木は、十五件あるが、就中岩手縣九戸郡久慈町長泉寺境内のものは地上一米半の幹圍十四米にも及び、此の種の巨樹中最高記録を示してゐる。然し指定されてゐるものゝ中には僅々五米半位のものさへある

のを以て見れば、奈良の此の公孫樹も、貴重な存在と云はねばならぬ。